

三原市で不思議な出会いをした三浦さんを大甕神社に案内して以来、私達は夫婦で毎年仕事初めの日に初詣をしていた。神主さんから話しかけられ三原から来た不思議な男の話をした事があった。神主さんは「大甕神社には昔から甕星信仰に熱心な人々が訪れる所なのだ」と話した。甕星は金星のことで「まつろわぬ星」の別名もある。悪神・香々背男とは、大和朝廷の征服に抵抗を続けた国津神の一人、頑強なアイヌ人の酋長だったのだろう。

初詣の翌日、ウラン在庫システムを JAVA で再構築させてもらった東海村の原子力関係の企業に新年のあいさつに伺うため年賀の品を求めてコーヒー店に入った。

その店は「將軍コーヒー」の製造元で十五代將軍コーヒーはハワイのコナの実を使った人気の商品である。私は十八代將軍コーヒーをよく注文する。その訳は「十八代」と仲間から呼ばれている顔見知りのコーヒー職人が近所に住んでいるからなのだ。

そのコーヒー店にはギャラリーが併設しており、絵画などの個展が扱かれている。普段はギャラリーを覗くことはないが、その時はコーヒーを挽いてもらっている間の単なる時間つぶしにと足を運んだ。

正面に等身大の白髭の古老が描かれている絵があった。焚き火の前に座り、頭上に鷹の剥製が載っている。周りの絵もすべてアイヌ人の伝説的英雄が描かれていたものだったが、私にはその絵だけは別格の光を放っていた。しずかに目を閉じているがしっかりとこちらを見ている。他人を容易に受け入れない「強そうな酋長」の顔である。タイトルに「甕星神 香々背男」と書かれてあった。とうとうあの日、三浦氏の呪文により鎖から解き放たれた「カガセオ」が目の前に現われたと思った。

画家の齋藤義孝さんは常陸太田市在住で少数民族アイヌ文化の研究者でもあるらしい。展示したものは数年前にフランスで発見された和人に對する松前藩での抵抗運動を描いた画の複製だと言っていた。その絵には明らかな差別とあでやかな固有の文化のきらめきが内在されている。

三原市から始まった「不思議な話」は「まつろわぬ魂の物語」だったのか。

「僅か六十年前には差別によりレストランで食事さえ出来なかった男の息子が最も神聖な宣誓をすることが出来る国になった」とオバマ大統領が就任演説をしている。戦争は、その大義名分のために言われない偏見や差別を生み人々を苦しめた。日本にも侵略のために、先住民のアイヌ人や朝鮮、台湾など隣国の人々を差別した歴史がある。先の大戦は「人種差別を撤廃させる世界戦争」だったとする論もある、確かに、アジアの植民地は開放され、アメリカの大統領に黒人が選ばれる程になっている。

土佐の海岸の洞窟で修業していた空海の口から入り、悟りをもたらした大きく光った明けの明星も、キリストの誕生をあまねく報せた宵の明星も同じ彗星であり強力なパワーを発揮している。古来より金星が輝きを増すと変化の嵐が吹くと言う。人はその変化の兆しを宗教と捉え、時には「まつろはぬ神」を特別にあげたりしてきた。佛通寺の山崎益州老師も、日本海軍の幹部が多数入信していたと言われる京都舞鶴にあった大本教の出口王仁三郎も欧米に対しての「まつろわぬ神」なのかも知れない。

高知から広島、愛媛へと旅してみた不思議な話は、昔、遠くの山の上に大きな煙突が見えていた自分の街に戻っていた。この街も、あの煙突を立てた男に巨大な銛を打ち込まれて出来た街であった事に気付いた。その男とは大岡昇平が軍需財閥と言い、松本清張が満州事変の黒幕の一人と睨んでいた革新右翼の中心人物の一人である。

陸軍大将の田中義一を担ぎ出し高橋是清に代わる政友会の党首に仕立て上げ、強力に右翼全体主義を陰から推し進めたその勢力は無意識のうちに人々の心にまつろはぬ魂を育みながら、日本の中枢に根を張りめぐらせ急速に日本全体を覆っていった。

大事な息子達が見知らぬ国で野垂れ死にしている「土地で御国の為になるのなら」と純朴な農民たちは飛行場や兵器工場に先祖伝来の土地を提供した。終戦近くには、全ての貴金属を供出し、その大量のダイヤモンドは占領軍に略奪されてしまう。

当時二十五歳の青年将校であった西野恒郎は、四十年後の昭和五十五年に作られた小さなスライド映画を見て、その記念誌に次のようなメッセージを残している。

「貧しいけれど静かでのどかな故郷の古老から、南海封鎖作戦に従軍中の私の元に一通の便りが届いたのは昭和十五年の夏の頃だったろうか。勝田に工場が来る事になるというニュースである。私は二千里はなれた南海のはてから故郷に思いをはせて、次ぎの様に返書を送ったことを憶えている。故郷が発展することはうれしいが、美しい自然と人情とが工場のばい煙でよごれ果ててしまわなければよいがと… 昭和二十年冬、終戦と共に復員帰郷した私のまえにあった「ふるさと」は、ばい煙によごれ果てたものではなくて、戦禍に打ちひしがれて瓦礫と化した工場群を持つむごたらしい姿であった。ただ、それにも拘らず、農村部の人達は昔とかわらぬ姿で暖かく迎えてくれたし、工場の社宅に住む人達も未知の人々ではあったが付き合ってみると皆いい人達であって、その意味で安堵もし、同時に人々が集積すれば人情が軽薄になるという漠然とした私の心配が全くの杞憂であった事を知らされたのである。困ばいから立ち上がった当時の・・・」と

メジャーなものだけではシステムは構成されない。小さな一見時代が残り残したような技術の多くがシステムを構成し多様な価値を生み出すのだ。それは無数に輝く小さな星がただ遠くにあるから小さく見えるのと似ている。